

P-016

新たな子育て家族支援のあり方に
関する報告—SomLicペアレント・
トレーニングを通した協働づくり

田中 真衣

白梅学園大学子ども学部

■背景・目的 近年、子ども虐待は社会課題であり続けており、早急に解決しなければならない。発表者は2007年に子育て家族支援SomLic (the style of my life with children) を立ち上げ、子ども虐待予防活動を行い続けてきた。方法として、ペアレント・トレーニング（以下、ペアトレ）に着目し、子育て支援の現場でペアトレを広めることをミッションとし、保育所、児童館、コミュニティセンター、子育てひろば、母子生活支援施設、クリニックで展開してきた。2013年にはSomLicペアトレを開発（90分×6回+フォローアップ回）し、各地で開催している。保護者がグループワークを通じた体験学習を経て、自分の価値観や行動を見つめ直し、自分らしい子育てスタイルをくみ上げていくことに特徴がある。そこで、子育て支援関係者がペアトレを保護者支援や地域支援として採用する実践を明らかにすることを目的とする。■結果1) 気になるペアトレ参加者 2024年度には、自治体からの委託でSomLicペアトレを開催した。自治体の広報力や無料といった環境設定により、より幅広い参加者が集まった。そのため、生活課題が生じている参加者や、子育てが気になる参加者が複数いた。自治体や関係機関との情報共有や連携の仕方を丁寧に行った。2) ファシリテーター養成講座 ペアトレを開催することができるファシリテーターの養成を2022年から開催し、48名のファシリテーターを育てた。養成講座は2日間で、受講要件として、福祉、教育、保健、医療分野で、子ども、子育て家庭への支援、教育に携わっている専門職としている。毎年、問い合わせが増えており、2025年は秋田県、千葉県、沖縄県でも開催予定である。フォローアップ講座受講者への事前アンケート結果から、ファシリテーターとして自信を持って行うことに課題があることが分かった。そこで、ファシリテーター取得後に、フォローアップ講座や見学会、コ・ファシリテーターとしての参加、スーパーバイズなどを行い、スマールステップで実践することにより、自信を高めることができるよう工夫した。■考察これらの実践を通した効果として、虐待予防、発達障害児早期発見、関係者のネットワーク構築が見られた。子ども虐待に対応していくためには、適切な関係機関と協働が大切になる。ペアトレを通して、各地域レベルで切れ目ない多職種協働による子育て支援システムが構築できる可能性が期待できる。

P-017

幼児前期の育てにくさを感じる子
どもの特徴と親の状況安部 泰子¹⁾、中谷 久恵²⁾¹⁾広島都市学園大学、²⁾広島大学大学院医系科学研究科

【目的】「育てにくさ」は発達障害の最初のサインであり、虐待につながることもある。幼児前期の子どもの育てにくさに関する文献から、育てにくさを感じる子どもの特徴とその時の親の状況について明らかにする。【方法】医学中央雑誌Web版を用い、「育てにくさ」「育児困難感」「幼児」「親」「特徴」をキーワードとし、「育てにくさ」or「育児困難感」and「親」、「育てにくさ」or「育児困難感」and「幼児」、「育てにくさ」or「育児困難感」and「親」で会議録を除く原著論文で2000年から2025年1月まで検索した。分析方法は、育てにくさを感じる幼児前期の子どもの特徴とその時の親の状況について記述されている内容を1つの意味内容のコード化とし、類似するコードをサブカテゴリとカテゴリに分類した。対象文献からデータを抽出する際には、著者の意図や意味が損なわれないように配慮した。【結果】分析対象文献は、245件から重複している82件、解説・特集、内容が研究目的に合わないものの155件を除外した8件にハンドリサーチ2件を加えた10件とした。幼児前期の育てにくさを感じる子どもの特徴は【発達遅延傾向】【他者とのコミュニケーションの問題】【他害行為】【自傷行為】【対人不安定行動】【不機嫌行動】【多動性】【衝動性】【運動障害】【偏食】【環境の変化が苦手】【睡眠障害】の12のカテゴリが抽出され、その時の親の状況は【子どもの行動が理解できない】【不適切な対処行動】【疲労感】【子どもへのネガティブな感情】【育児への自信喪失】【自己嫌悪】の6カテゴリが抽出された。【考察】子どもに育てにくさを感じる親は、子どもを理解できないことで、不適切な対処行動をしてしまい、自己嫌悪、育児への喪失、疲労感、さらには子どもへのネガティブな感情を抱き、虐待につながる可能性が高くなると考えられる。今後は虐待予防と発達障害の早期発見・早期支援につなげていくために、1歳半や3歳児健診で問診に活用できる質問票の作成を検討し、親とのコミュニケーションや支援に結びつくようにすることが重要である。